

<参考資料>

ヤノベケンジ氏による作品コンセプト

あいちトリエンナーレ 2013 において、愛知県美術館の内部に教会を制作しそこで結婚式を行なう。

それはそもそも神や宗教の伝達装置としての教会に始まり、そこから派生し分離していった美術や美術館から、美の起源に遡る行為でもある。

20 世紀美術を中心にコレクションされている愛知県美術館、また結婚式を専門とした教会（結婚式教会）が全国で一番多い愛知（愛を知る）においてもっとも適したプロジェクトであると言える。

20 世紀美術はほとんど神は描かれない。また、結婚式教会において結婚するカップルにクリスチャンの割合は極めて低い。しかし互いに美に帰依しているということでは共通していると言える。

この結婚式においても、神ではなく美に愛を誓うことになるだろう。しかしそもそも神、愛、美は同根のものである。結婚式をすることで美の起源を再確認することができるだろう。

その際、美術館内に設置された小さな教会には愛知県美術館のコレクションから、「愛」について描かれた作品を展示したい。

アンリ・マティスの『ロンサール恋愛詩歌集』の挿絵として描かれたリトグラフである。この作品は、16 世紀のフランスの叙事詩人のテキストの中から自分の好きな詩を選び、126 のデッサンを描き下ろしたものである。

絵画自体は 1941 年から 43 年にかけて描かれたが、テキストが印字され、出版されたのは 1948 年である。1948 年と言えば、マティスの集大成とも言える最晩年の作品、ヴァンスにある『ロザリオ礼拝堂』が制作された時期と重なる。

生命の樹を表す切り絵から作られた単純な形態、青（空）、緑（植物）、黄（光）という厳選された色によるステンドグラス、奥の壁面には白いタイルに単純な黒の輪郭線で描かれたキリストの苦難の歴史。そこに太陽の光が差し込んで初めて教会に命が吹き込まれる。太陽と地上による婚姻がそこで結ばれる。

マティスの恋愛から永遠の愛を誓う教会建設の変遷をなぞりつつ、同じく黒い輪郭線のみで描かれた『ロンサール恋愛詩歌集』を壁面に飾り、光によってそこに愛と美を浮かび上がらせることを試みる。

20 世紀最大の画家の 1 人であり、根源の美に辿り付いたマティスを参照し、同じく太陽をテーマにし続けている私ヤノベケンジが、新たな太陽を美術館に吹き込み、美と愛を体現する教会、結婚式を企画したい。